

小郡と七夕のおはなし

本来であれば七夕で彩られるこの季節。例年、七夕に関連したさまざまなイベントが市内各地で催されます。今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ほぼ全てのイベントが中止となりましたが、改めて「七夕の里おごり」の由来をご紹介します。

岡商工・企業立地課 観光係 ☎ 72・2111

昨年行われた「短冊ロード」

七夕伝説の物語

昔々、天の川の西の岸に織女(しよくじよ)という機織りが上手な娘と、東の岸に牽牛(けんぎゆう)という牛飼いの青年が住んでいました。神さまは、働いてばかりの2人を引き合わせて夫婦としましたが、一緒に暮らすようになると、2人とも働かなくなってしまうと。怒った神さまは2人を引き離し、年に一度、7月7日の夜にだけ天の川を渡って会うことを許しました。



七夕? たなばた? 棚機?

そもそも「たなばた」の由来の1つは「棚機(たなばた)」であると言われています。「棚機」とは古い日本の行事で、乙女が着物を織って棚に供え、神さまを迎えて秋の豊作などを祈るものでした。

仏教が伝わると、この行事はお盆を迎える準備として旧暦の7月7日の夜に行われるようになります(お盆行事が8月に行われるようになる)。七夕もあわせて8月に開催されるようになりました。

現在「七夕」という2文字で「たなばた」と読んでいるのもここから由来していると言われています。

小郡の織物

布を織る技術は弥生時代に始まりますが、小郡市内の古代の遺跡からは糸をつむぐための道具(紡錘車)が数多く見つかっています。

また、972年につくられた『延喜式(えんぎしき)』という書物には各地から朝廷に差し出す献上品について記載した部分があります。その中で小郡を含む筑後国の献上品は「米と織物」となっていることから、小郡には織女と同じように機織りが得意な人が多くおり、当時から機織り「棚機」の信仰が根付いていたと考えられます。

★ 宝満川を天の川に見立てると、右岸・大崎に七夕神社があり
★ 左岸・稲吉には犬飼さん(牽牛社)が祭られています。★

大崎の七夕さん

大崎にある七夕神社の正式名称は媛社神社といい、地元では親しみを込めて「七夕さん」と呼ばれていました。その歴史は古く、肥前風土記(730年ごろ)にもその由来が記述されています。

媛社神と織女神を祭っており、織女神は、機織りの技術に優れた神様と伝えられ、特に女性の信仰を集めたと想像されます。



毎年8月6日から8日にかけて、七夕神社夏祭りが開催されます。8日に行われるお焚き上げに合わせて、全国各地から願いごとを書いた短冊が奉納され、その数は約60万枚にのぼります。
※今年は新型コロナウイルスの影響で中止となりました

稲吉の犬飼さん

「犬飼さん」とは「犬飼星」(彦星の和名)のことを指していると考えられています。大正12年(1923)に稲吉の老松神社へ合祀されました。

いつ頃から犬飼さんが祭られるようになったかは分かりませんが、彦星と織姫という中国の七夕伝説を再現した当時の人々のロマンが感じられます。



七夕に関する古老のお話

- 大崎に通じる道は、8月6日から7日の夜明けまで、久留米・八女・うきはなどから夜中行列をなして歩いて参詣があっていた。げたの音で一晩中寝られないくらい人通りが多かった。
- 昔は横手橋という木造の橋を渡って宝満川を渡っていたが、通るたびにガタガタと音がするので「ガタガタ橋」と呼んでいた。
- 七夕の日に神社近くの川で髪を洗うときれいな髪になると言われており、モッコクの葉をもんだものをせっけん代わりにして洗っていた。



小郡で見られる
さまざまな七夕

小郡を含む周辺地域では、小学1年生で迎える七夕を「初七夕(はつたなばた)」と呼び、つる付きの大きなスイカを贈ったり、芋や稲などの葉にたまった朝露ですった墨を使って七夕の掛け軸を書いたりします。また市内には七夕にちなんだものがたくさんあります。ぜひ探してみてください。



小郡市観光大使
オリリン・ヒコリン

「七夕プロジェクト」推進中

「七夕」を地域のブランドとして確立し、それを活用した地域活性化に取り組むため、市は平成30年に「七夕プロジェクト」を立ち上げました。昨年は、全国から届いた短冊を飾った「短冊ロード」や、願い事を書いた短冊を空へ飛ばす「スカイランタン」などのイベントを開催。今後も「七夕」にちなんだイベントや商品開発などを進めていきます。

